OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上級速読の授業における一考察
Author(s)	高月, 喜美
Citation	大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究. 2005, 3, p. 103-120
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6013
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

上級速読の授業における一考察

高月　喜美

【要旨】

上級速読の授業の3学期間の記録からこの授業における教材・授業形態の報告を行った。上級速読の授業を受講する学生は、日本語で速く正確に読み、様々な情報を得られるようになりたいというニーズを持っている。しかし、上級レベルの学生であっても授業開始時にかなりの速読のスキルを持っている学生とそうではない学生がいた。

学生個々のニーズという点では、自分の興味のあるものを読みたい、自分の関心があるテーマについての知識を深めたい、論文等を書くときのため、速読のスキルを生かしたいなどがあった。上級速読の授業を受講する学生は読解に意欲的であるが、読解を何に結び付けたいかという点でも、受講者のニーズは異なっていた。そこで受講者のニーズ・スキルの差、クラスの学生数を考慮し、大まかにいくつかの授業形態を試みた。そして、その問題点や課題を挙げた。

1．はじめに

上級の学習者が日本語をより自然に読めるようになるためには、どのような読解のスキルを身につければ良いのか。速読には読む目的に合わせて、スキャニング（情報取り）、スキミング（大意取り）のスキルを使ったり、予測・推測・類推したりすることも必要である。上級レベルの学生と言っても、学期始めに上級に上がって授業を通して速読のスキルを習得していきたいと考えている学生と既に速読のスキルがある程度、またはかなり身についていて新聞記事が無理なく読める学生がいっしょに受講していた。

この授業を受講した学生は学期によって人数もばらつきがあり、また読解力だけではなく、会話力・文章表現力にも学力差があった。個々の到達目標を持ち、それに関連づけて授業に臨んでいる者、例えば、自分が書くレポート・論文の参考になるようにと、この授業で読む文章の表現・文体の違いに着目して、時折、文章表現の比較を行いながら文章を読んでいる学生もいた。また、漠然といろいろなものが速く読めるようになりたいと思って受講している学生もいた。

教材に関しては、既成の速読用の教科書に沿って学びたいというニーズとまた新聞記事等の生教材を読みたいというニーズが確認された。読んだ資料をもとに、レジュメを作って口頭発表してみたいという学生、レジュメを作らないまでも簡単な手持ちのメモをもとにならば口頭発表してみたいという学生もいた。

学生が読んでみたい生教材は、日本語に関するもの、金融、経済、宗教等、多岐にわたっていた。授業では、学習者が速読のスキルを高め、それによって必要な情報を得られるようにと心がけた。だが、授業の進め方は学生数や学力差・ニーズ、また教材によって学期ごとに調整する必要があった。そこでそれらを考慮し、いくつかの異なる授業形態を試みた。

2．授業概要

2-1. 対象

速読の日本語はＪ（日本語・日本文化研修生）とＲＡ（研究生上級）が対象であるが、ＭＡ（短期留学生上級）からの受講者がいた学期もある。これまでに受講した学生は以下のとおりである。

2003年春学期　　Ｊコース　（カナダ１、韓国２、ベトナム２）
学生数　（13人）　ＲＡコース（ロシア１）
　　ＭＡコース（エジプト２、韓国３、ロシア１、フランス１）

2003年秋学期　　Ｊコース　（アメリカ、モンゴル、ロシア）
学生数　（３人）

2004年春学期　　Ｊコース　（ロシア、ベトナム）
学生数　（４人）　ＲＡコース（マレーシア）
　　ＭＡコース（タイ）

2-2. 教材と授業形態

教材は速読の技術・方法を学ぶものとして『中・上級者のための速読の日本語』（以下『速読の日本語』と略す。）を用いたが、実践的に読み進めるための生教材としては『新日本語の現場』、『若者語を科学する』、『国際人流』と新聞記事を用いた。教材は、３つの学期を通して使用したものとそうではないものがある。また、同じ教材でも、学期によって、学習者のレベルによって使い方を変えたものもある。

速読した内容をどのような作業に結び付けるかで授業形態は大まかに、次の３つの方法をとった。(1) ①「レジュメ・メモを作成し、口頭発表をする」、②「要約・感想文・メモを書く」、③「その場で読んで口頭で要約させたり、説明させたりする・クラスで討論を行う」。ただし、読んだ内容を口頭で確認して、後日、感想文やメモの提出をさせたこともあった。

2-2-1.『速読の日本語』を中心に速読法について学ぶ

『速読の日本語』は、「基本技術編」、「実践編」、「挑戦編」の３つのパートに分かれている。各パートの練習は次のような内容である。

「基本技術編」：日本語のスキャニングとスキミングの技術を高めるための練習。
「実　践　編」：実際の新聞・雑誌の記事や表・グラフを使って、速く情報をつかみ、重要なポイントだけを理解する練習。
「挑　戦　編」：ショートショートや短篇小説を読む。

この本は段階的な練習を通して、学習者が初中級段階の読み方から上級段階の速読の読み方に近付けられるような構成である。この本では速読の訓練をすることの５つの最終目標(2)が掲げられているが、ここで、その中の「普通の日本人の読み方に近い、自然な読解法を身につける」を取り上げてみる。この目標のためには「言語指向の読解（language-oriented reading）から内容指向の読解（content-oriented reading）への転換がスムーズに行われるよう、読む

という行為を解読（decoding）から読解（reading）へと移行させる訓練をします。」と説明されている。

初中級の外国語学習では、新しい語彙や文法を学び、文構造を理解する目的で文を読むが、この言語指向の読解を長く続けていると、上級で広く多くのものを読まなければならない時期にきても、文法や語彙をいちいち分析・確認しながらでないと次へ進めないという問題が生じてくると言う。(3) 日本語の学習者だけではなく、外国語を学習したことのある人なら、同じような経験をしたことがあるのではないだろうか。

上級速読の授業でも上記のような問題が起こった。2003年春学期は学生数が13人で、学生の読解力の差が大きかった。上級へ上がったばかりの学生３人は、言語指向の読解から内容指向の読解へまだスムーズに移行できない段階にあった。速読の練習では、必要な知識や情報だけを読み取るという説明をした後、スキャニング（情報取り）の練習を行っていたのであるが、日本料理名に関する語彙の分析・確認をしたがり、そこで立ち止まり、前へ進めないという状況が起こった。日本料理名がわからなくても解ける問題であったが、この３人だけがどうしても日本料理名について説明をしてほしいと言うので、他の学生には別の練習問題や生教材の速読を進めさせ、この３人だけに料理名の説明を行うこととなった。

上級に上がってまもない学生、また既成の教科書にしたがって速読のスキルを習得したいという意識の強い学生には『速読の日本語』は使いやすい。しかし、学生が内容指向の読解力をかなり身につけていて、その意欲がさらに時事的なもの、自分の研究分野に関連するものに向かっている場合は、テキストに沿って授業を進めるのは難しくなる。そのような学生でクラスが構成された場合は、『速読の日本語』は速読の方法を把握させるための参考書的なものに止めた。また、この本は英語だけで語彙やその他の説明がされている。学期によっては英語を全く学習したことのない学生もいた。それで、この本は学生のスキル・レベル・ニーズと学生の母語・既習外国語も考慮して使用する必要があった。

2-2-2. 各学期の授業形態

2003年春学期は受講者13人で学生のレベル差が大きいクラスであった。『速読の日本語』を最初から勉強したいというクラス全体のニーズが確認できた。しかし、上記のような語彙の分析の問題を除いても、学力差があったため読むスピードがずいぶん異なった。それで、時間を計って問題を解かせ、何分で解けたか用紙に記録させ、提出させた。授業中に進んだ学習者の最終ページは、一番少ない者が43ページで、多い者が131ページと大きな開きがあった。言語指向の読解から内容指向の読解へ、まだスムーズに移行ができていない学生もいる一方、内容指向の読解が出来る学生も多かったので、読んだ内容をレジュメや感想文にするという授業形態も行った。その詳細については後で述べる。

問題を解いていく中での質問は、授業中に説明するか用紙にメモさせるという形で進めた。学生の疑問点がクラス全体に説明したほうが良い内容なら、クラス全体に説明を行った。例えば、「大蔵省」やまた「省」「庁」の違いについての質問があったので、資料を配布し説明も行った。(4)

2003年秋学期は受講者３人で、いずれも内容指向の読解ができた。当初は『速読の日本語』を部分的に使って授業を進めたが、途中で、アメリカ人学生がこの本を図書館で借りてほとん

ど読んでしまったため、使いにくくなった。あとの２人の学生も、既成の教科書より生教材により関心を持っていたため、主に新聞記事を使い、その内容について話し合うという授業形態をとった。

2004年春学期の学生４人も、全員内容指向の読解がかなりできる学生であった。それで、授業中は『速読の日本語』より、新聞記事等の生教材を読みたいというニーズが確認できた。理解度や疑問点は口頭と要約・感想文・メモで確認を行った。４人のうち２人は日頃から日本の新聞を読み、必要な記事の切り抜きをしており、生教材への関心が特に強かった。あとの２人も内容指向の読解に移行できている学生であったが、『速読の日本語』の挑戦編を夏休みの自習課題としてやりたいという要望があったため、課題を配布した。

2-2-3. レジュメ・メモを使った口頭発表

2003年春学期にこの方法を用いて授業を行った。

レジュメ作成・口頭発表には読売新聞に連載されている「新日本語の現場」[(5)] を用いた。日本語に関することならどの学生にも共通のトピックであり、現代の日本語事情を取り上げているこの記事は、上級学習者ならさほど苦労することなく読めるからである。この記事を５～６つまとめて分担させた。レジュメを作って発表してみたいと言った学生は３人であった（韓国２人、ロシア１人）。

速読した記事内容のレジュメ作成・口頭発表となると、学生の負担（生教材を速読した上で要約し文章で表す／書いたレジュメに基づいて系統立てて内容説明を行なう）が大きい。それで人数の多いクラスでは、討論できるような内容の記事に関しては、発表者を決め、メモを発表者の手持ちの資料とする口頭発表も行わせた。レジュメを作成しての発表より手持ちのメモを見ての発表ほうが負担は軽いと考えられるが、発表者となって多くの学生の前で説明をするということの心理的プレッシャーや会話のスキルの問題からか希望者は少なかった。[(6)]

メモを用いての口頭発表を希望した学生は２人であった。１人は読売新聞の「相手の立場で悩みに答える／あなたはひとりじゃない　大平光代さん」を速読した内容に基づいて発表した。もう１人は学部の授業を聴講し、日本語学に詳しく、キャンパスで聞く若者言葉を調べているという学生であった。「新日本語の現場」は最近の若者がどのように日本語を使っているかという内容であったため、授業中に若者語に関する議論へと発展した。若者語についての発表はそれを受けて行われたものである。参考資料としては、教師側で『若者語を科学する』から「若者語の造語法」[(7)] の章を配布した。配布資料は発表者・聞き手側の学生にもあくまで参考資料程度のものであり、若者語が使われる背景や配布した資料の概要説明に止めた。

これらの授業形態は、他教科の提出物が少ない学期始めに行った。発表希望者は記事を速読し要約する力のある学生達だったので、記事を渡してから１～２週間後には発表の準備ができていた（資料1.）。授業の始め30分ぐらいの時間を学生の発表と質疑応答にあてた。読んだ記事内容について、クラス全体で討論させた。学生には１人１つでも発表者に質問をするようにと指示した。内容について踏み込んだ質問ができない場合は、そのトピックについての感想を述べるだけでも良いという指示を与えた。

レジュメ・メモを用いての口頭発表に基づいてクラス全体で討論するという授業形態を続けるのは困難であった。というのは、発表してみたいという学生が限られていたし、上級レベルの

学習を始めたばかりの学生には、速読・発表用資料の語彙・表現が難しく、発表者が話している記事のトピックについての概要を把握するだけで精一杯で、詳細な内容まで理解するのが困難だったからである。現代の日本語事情について書かれた記事であっても、13人の学習者の読解力やまた既存知識の差などから、細かい踏み込んだ表現に言及して質問のできる学生もいれば、簡単な感想程度の意見しか述べられない学生もいた。

そこでレジュメ・メモを使った口頭発表のときは、生教材を速読するのが困難な学生には、発表者の説明をもとに、内容理解の手がかりとなるようなキーワードに線を引く作業をさせた。また、必要に応じて発表者にはキーワードを板書の上、その読み方も書く配慮をさせた。

2-2-4. 口頭での説明や要約を中心に

口頭発表とそのあとの質疑応答に時間を割くと、授業中の多読が進まなくなるし、人数の少ないクラスでは学生を発表者と聞き手に分けるのが難しい。それで、少人数で比較的学生のレベル差が小さくて、新聞等の生教材がなんとか読める学生のそろったクラスでは、発表者と聞き手という形はとらずに、それぞれの学生に順番に速読させた内容について口頭で説明させることで、大意・概要の確認を行った。

授業中に共通の生教材を用いるときは最初に音読をさせた。数段落ずつ音読をさせることで、読み方や言葉の意味の確認を行った。学生によって既知の語彙が異なるので、学生に言葉の意味を説明させ、また、数分黙読させて各自辞書でも言葉の意味を確認させた。段落の要点を確認する質問をした場合に、書かれている文章をそのまま棒読みするというような学生はいなかった。(8)

しかしながら、生教材の大意・概要が理解できても、わかりにくい言葉を取り出して使い方の説明を求めたり、自分の知っている類義語を挙げて比較してみたりというふうに、細かい部分に目が行き、その派生的なことを知りたがるという状況も見られた。

2つの学期に使った教材で使い方をすっかり変えたものの例として、「若者語の造語法」(『若者語を科学する』) を挙げる。「若者語の造語法」は2003年春学期と秋学期に使用したが、2004年春学期は学生の若者語への関心が低かったので使用しなかった。2003年春学期と秋学期に受講した学生は全員別の学生であったが、どちらの学期も若者語に関心を持っている学生が数名いた。2-2-3 で前述したように、2003年春学期の学生数13人でレベル差が大きいクラスでは、「若者語の造語法」をクラス全体で読み進めることができなかったので資料として配布し、教師が説明するに止めた。2003年秋学期の少人数でレベル差の小さいクラスでは、1回の授業でも数ページの大意・概要を把握させることが可能であった。詳細な意味を理解する必要のない若者語の例は、わかりやすいものを2～3確認しながら速読させ、内容について口頭で説明をさせた。若者語を学術的に分析してまとめてあるものだが、内容指向の読解ができ、語彙知識の豊富な学生でクラスが構成されている場合は、無理なく読める教材である。

口頭で確認を行う場合、トピックの異なる記事内容を同じ授業時間内に扱うのは難しい。内容指向の読解が出来る学生がそろった少人数のクラスでは、異なる生教材を与えた場合でも、口頭確認が可能な状況では、できるかぎり授業中に行った。記事内容に関心が持てるか、概要把握ができるか、一読してわかりにくい箇所がないかや、また、記事の難易度などの確認である。自分の記事を読みおわった学生から順番に、その場ですぐに読めるものや、前の週に渡し

ておいた記事についての感想や意見も聞くことができた。ただしクラス全員が関心を持っているトピックではないため、討論させることはできなかった。

2-2-5. 要約・感想文・メモの作成

学生がおのおの関心のあるトピックの記事を速読したような場合は、授業中、個々に口頭での内容把握の確認がしにくい場合がある。そこでおのおのが速読した記事についての要約・感想文・メモを提出させた。学生によって関心の度合いの異なる記事があった。例えば、夕刊読売で取り上げられていた「遊歩人」のような連載記事である。さまざまな国の名作の舞台となっている都市やその歴史等について写真入りで紹介されているものである。また、夕刊読売の「こどもページ」の「出会う」には世界の子供達の生活についての記事、同じく「知る」には時事的な問題が掲載されている。子供用に書かれているので、漢字にはひらがなで読み方が書いてあり、長い記事には、数段落ごとに小見出しがついていて読みやすく、絵や写真も使われているので理解しやすいものが多い。ただし、「大学改革（独立法人化）」「郵政民営化」など、組織やしくみに関するものは概念自体が理解しにくいので、子供用であっても理解しやすいとは言えない。(9)

上記のようなもの以外にも学習者の国のことや、その国と日本との関係について書かれている、学習者の興味を引きやすい記事を取り上げることが多かった。中には、古今和歌集が挿入されているような記事(10)もあって、学習者にとって必ずしも読みやすい記事ばかりではなかったが、比較的内容推測がしやすいトピックだと言えよう。「遊歩人」のある記事を読み感想文を書いた学生は、自分の国について新たな発見ができたと感じていたようだ（資料2.(1)）。

学生がクラスで討論できるような共通のトピックの生教材でも、討論後、使用した記事によってはメモや記事の疑問点に線を引いたものを提出させることもあった。読んだ記事内容をメモ程度にまとめさせることによって、大意・概要がどの程度理解できているか、また、疑問点の違いについても知ることができた。学生の感想文やメモの一部を資料として記載したが、提出時のままで文法・表記等の間違いについては手を加えていない（資料2.(2) ～ (4)）。

2-2-6. トピックと教材

学生が関心を示したトピックを学期ごとの大まかな特徴として述べると以下のようなものである。まず日本語に関するものであるが、『新日本語の現場』からは、最近の日本語の使われ方・若者語・カタカナ語に関して数ページ選んで速読をさせた。また、併せて関連のある論説・社説等の新聞記事も教材として使った。日本語の問題の中でも、ある学期には方言、特に大阪弁に関心を持っている学生がいたり、また、別の学期には大阪弁や若者語には関心がないが、敬語を研究テーマとしているという学生がいた。そのような学生がいた学期には大阪弁と敬語に関する新聞記事もクラスの他の学生の意見も聞いた上でクラス全体の教材とした。

日本語以外には、経済・金融や留学生の就職に関する問題に関心を示している学生が多かった。それで、新聞記事からは経済・金融関係のものを選んだ。将来、日本でさらに研究を続けようと思っている学生もいたが、母国での学業を残して留学してきている学生が大半であった。そのような学生の中には母国で学業を終えたあと日系企業に就職したいという者が多かった。それで『国際人流』からは学生に就職関連の記事やその他の自分の関心のある記事をいくつか

選ばせてみた。学生が選んだものの中に留学生の就職サポートに関する記事があったので、それをクラスで読み進めた学期もあった。(11)

学生がとりわけ経済の問題に関心を示した学期には、「外国人労働者」「自由貿易協定」等に関する記事をいくつか速読させた。2002年～2004年の同じトピックの記事を速読させることで、時間の流れに沿って社会的動向を把握させた。また、人・物の流れ、日本社会の受け入れ状況と法整備という観点から、母国での社会的・経済的な状況と合わせて討論させた。(12) 関連のある記事を続けて読むことによって、難しい言葉や社会におけるしくみが理解しやすくなり、前後の事実関係についての推測も容易になったと言えよう。

トピックの選び方に関しては、全員が同じように関心を持っているもの、または、誰かが強く関心を持っていて、そのトピックなら他の学生も読んでみたいと思うようなものをクラス全体のものとした。学生に記事を選ばせることで、ふだん学生達の意識がどういうところに向けられているのか知ることができる。それで、新聞等が読め、内容指向の読解に移行できている学生がそろっていた学期には、自分達で読んでみたい記事を持ってくるように促した。しかしながら、教師側で準備したもので良いという学生がほとんどで、学生寮にある新聞をいつも読んでいるという学生が持ってきたもの以外に、新聞記事に関しては学生が選んだものはなかった。(13) 日頃から日本の新聞等に目を通している学生もいれば、そうではない学生もいたり、日頃から自分の研究用などの切り抜きをしていても教材提供には積極的ではない学生もいた。

生教材の種類としては、新聞記事がほとんどで、雑誌は『国際人流』からいくつかの記事・エッセーを扱ったのみである。会話文が多用されているものとしては、漫画『千と千尋の神隠し』の第1巻の最初の方を2003年秋学期に使用した。これは受講していた学生が3人とも映画かビデオで知っていた話であり、漫画の内容が映画・ビデオのスクリプト通りなのか知りたいという学生達の要望があったからである。3人の中でモンゴル人学生が特にこの漫画に強い関心を示していたが、この学生のモンゴルの大学では「スタジオ・ジブリ」の他の作品で「魔女の宅急便」のようなものも日本語の授業の時間にビデオで学習したということが話題に上った。

3．考察

3学期間の異なる授業形態と教材の使い方について述べたが、授業形態・教材が異なっても3学期間を通して痛切に感じたことは、学生の語彙知識の量と速読時の理解度の関係である。

新聞のような生教材は語彙が多いため、理解しにくい言葉にぶつかったとき、そこで多かれ少なかれ立ち止まる傾向はどの学生にも観察された。その中でも、学生が特に理解しにくいと感じている言葉は日本社会の組織・しくみを表すものやカタカナ語、擬態語などであった。(14) 読んだものを口頭で内容確認し、そのトピックについて討論する授業形態では、口頭での質問が気軽に行える。そのため、内容指向の読解ができる学生が生教材の大意・概要が理解できるにもかかわらず、教材の中に使われている言葉を類義語と比較してみたり、それぞれの言葉の使い方を文の中で確認してみようとするように、速読の授業目的からはずれた方向へ行くこともあった。

社会が変わると組織・しくみも変わり、新しい言葉が生まれる。上級レベルの学生が新聞・雑誌等の生教材を読もうとすると、大量の語彙に遭遇することになるが、そこには既存の語彙だけではなく、新語・流行語・若者語や、学習者の国とは異なる社会の組織・しくみの概念を

表すものも含まれている。学習者の語彙知識の量は速読・多読のしやすさ・理解度に大きな影響を与えている。(15)

社会の組織・しくみを表す語彙は、学習者の国とは体系が異なるものがとりわけ概念を推測しにくく、理解しにくいと考えられる。特に、新しくできた組織・しくみは日本人にとってもすぐに理解できるものではなく、学習者にはさらに難しいものとなる。例として「大学改革(独立法人化)」とその記事について述べる。

2004年春学期登録前の授業に、「大学改革（独立法人化)」に関する夕刊読売の「こどもページ」を教材として使用してみた。「法人」については速読に入る前に説明を加えたが、この記事は最初の数段落を学生達に読ませたところで、「難しい」という声が聞かれ、その時間には途中までしか使えなかった。結局、授業を選択しなかった学生のうち数人の声であったと考えられる。登録した学生は全員内容指向の読解ができ、既成の教材より生教材を好み、速読のスキルを駆使して積極的な姿勢で取り組んだ。(16)

速読によって必要な情報を得るためには、視覚情報に対する集中力と読み取ろうとする積極的な姿勢が必要となる。自分が関心を持ち既存知識のあるようなトピックであれば推測もしやすく、速読の姿勢はより積極的になる。関心は持てても概念の理解しにくいものは読み取ろうとする意欲が下がる。理解しにくい概念を表す言葉の前で立ち止まって前へ進めないでいる学生がいた場合は、速読方法の説明だけでは十分ではなく、実際に教材を読み進める中で前後からの推測によって読み進めるように促す必要があると強く感じた。

しかし、内容指向の読解に移行途中にあるような学生で漢字の知識が少ない学生がいる場合、速読があまり無理なくできる学生と同じ生教材を集中力によって読み進めるように促せるものではない。カタカナ語についての一部の生教材を除くと、漢字を含む語彙がどれくらい読めるかも生教材の読み進めやすさに関わっていると考えられた。(17) 上級レベルでも基礎的な練習が必要な学生は既成の教材で速読の技術を学ぶ練習の割合を多くする必要があるが、内容推測のしやすい短い新聞記事や「こどもページ」を読む練習を段階的に少しずつ入れていくことも可能である。

クラスの学生のレベル差が大きい場合は、レジュメを用いた口頭発表という形態で授業を進めた。それは口頭発表ができる学生には、速読を口頭発表に結び付けて行う練習の場となった。そして内容指向の読解に移行できていない学生にもクラス全体で扱う記事内容の概要を理解させ、いっしょに授業参加させることができた。しかしながら、口頭発表ができる学生であっても、皆がそれを希望するとは限らないので、常に行うことができる授業形態ではない。さらに、この形態では内容指向の読解ができていない学生が自分の力で生教材を読んで大意・概要を把握したことにはならない。口頭発表が可能な学生に合うレベルの速読用資料を内容指向の読解ができていない学生が自力で読もうとした場合、それは速読ではなく言語指向の精読にしかなり得ないであろう。

上級速読の目標の１つは普通の日本人の読み方に近い自然な読解法を身につけることである(18)が、受講者の多くはそれに止まらず、時事的な情報を得たいと思って授業に臨んでいた。しかし実際に生教材を読ませてみると、正確に内容を理解するための語彙力・既存知識が十分な学生は少なかった。彼らの最終目標を自然な読解法というところに大きくまとめることができても、「上級」という言葉でひとまとめにされる学生のレベルはさまざまであった。それで、とり

わけ生教材を使った授業において、教材の難易度を考慮の上使用する必要があった。

さらに全員が生教材の速読を希望すれば、学生の読みたいもののトピックが多岐にわたることになる。[19] 全て取り上げられないかもしれないが、半期の間に複数のものを取り上げることは可能である。ある1つのトピックでも記事の長さや「こどもページ」のように部分的に振り仮名をふってあるものも含め、難易度のあるものを使用したり、漢字の知識が少ない学生には生教材の語彙に振り仮名をつけたものを渡して予習させることも場合によっては必要であろう。このような方法によって生教材を読み取ろうとする姿勢を少しでも無理なく積極的にさせることができると考えられる。[20]

4．おわりに

数日前、数週間前に起こったような事件について、速読の練習をさせる場合、既成の速読用テキストを用いることができないため、新聞等の生教材に頼らざるを得ない。新聞等の生教材からは、ごく新しい情報が得られる利点がある。その反面、さまざまなトピックごとに難易度のある複数の記事を授業の進度に合わせて準備することが常に可能であるとは限らない。生教材を速読したいという学生のニーズに応えるためには日頃から様々な生教材をストックしておく必要がある。しかし生教材を多用する授業は既成の教材を用いたときほど効率良く行えるものではない。それぞれの学生に少しでも無理なく効率良く速読を進めさせようとすると、福本（2004）に述べられているようなグレード別の多読用教材が開発され、『速読の日本語』や生教材と併せて使用できることが望まれる。

注

1）レジュメ・メモ・要約・感想文の書き方や口頭発表の仕方については、枚数・時間・板書等に関して簡単な指示を与えたが、特別な指導は行わなかった。

2）

> 目標　①　必要な情報や知識だけ、素早くつかみ取れるようになる
> 　　②　普通の日本人の読み方に近い、自然な読解法を身につける
> 　　③　さまざまな分野のものを大量に読めるようになる
> 　　④　予測・推測の力をつけることで読解力を伸ばす
> 　　⑤　日本語で読むことを楽しめるようになる
> 『速読の日本語』「本書について　－学習者の皆様へ－」p(8) より一部抜粋。

3）『速読の日本語』p170参照。

4）大蔵省は現在の財務省。資料はインターネットより「首相官邸　キッズルーム　内閣の役割　行政のしくみ」を配布。

5）連載記事「新日本語の現場」は文庫本『新日本語の現場』にまとめられ、2003年2月に出版された。第1部「気になる若者言葉」第2部「氾濫するカタカナ語」という構成である。授業では2004年秋学期から本からも記事を選んで使用した。

6）「大勢の人の前で話すときは緊張する」というような心理状態については藤家（2004）p8に理論的に述べられている。

7）参考資料は、米川（1998）pp47－57で、造語の方法や若者語の例が挙げられている。「若者語は娯楽と会話

促進をねらって使用される」と述べられている。若者語が新語であるという観点から、後日、読売新聞記事、米川の「『新語・流行語辞典』刊行」も速読用・参考資料として配布、授業中に解説を行った。

8）「～ですか」と尋ねても、教材の文章をそのまま用いて、「～だ」と普通体で答えるような中級レベルなら起こりうる問題。

9）夕刊読売には「こどもページ」が掲載されている。内容別に「ＫＯＤＯＭＯ読む（月）、出会う（火）、楽しむ（水）、伝える（木）、学ぶ（金）、知る（土）」と分かれている。尚、（土）の「ＫＯＤＯＭＯ知る」のみ「子どものニュースウイークリー」という表現も用いられているが、本稿では、一括して「こどもページ」と表現する。

10）読売新聞記事「ベトナム政府　王宮跡ハノイ残す英断」に「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも『古今和歌集』に載る阿倍仲麻呂の望郷歌である。（中略）唐朝は、南方経営の支配機関として7世紀にハノイ付近に安南都護府を設置したが、仲麻呂はその長官として赴任していたことがある。（以下省略）」とある。

11）「世界に張り巡らされたネットワークでＡＰＵの学生たちの就職を支援」p8「企業とのコミュニケーションを促進し留学生の就職をサポート」P9、いずれも『国際人流』197号。

12）以下のような新聞記事の内容に基づき、感想・意見を述べさせた。尚、関連の感想文やメモは資料2.(2)～(4)のとおり。
「人口減少社会　消えてゆく働き手」「人口減少社会　外国人就労長期的視点で」「外国人労働者受け入れ論議活発化」「外国人労働者どう受け入れる？」「看護師・介護士『外国人に開放』申請　改革特区　病院など12施設」「対タイ・マレーシア・フィリピン　繊維製品の関税全廃　日本、合意へ」「多言語の法令・判例検索　リスク回避へシステム化」等。

13）この学生はマレーシアの学生で、寮でいつも朝日新聞に目を通しているとのことであった。この学生が授業用に持ってきた記事には次のようなものがあった。「やまぬ惨事なぜ　佐世保の父の姿『ああ同じ』学校と安全」「タリバーン時代は体に鎖巻かれたよう　アフガン留学生ディーバさん　女性の苦難聞いて」「よつ葉びより」「ミョウガの効能」「人と人との間で生きて人間に」「街中に広がれ院内の優しさ」

14）しくみを表すものは「独立法人」、擬態語は「ざっくり」（超ざっくりのツイード）があった。カタカナ語では、「ケータリング」は英語母語話者にはすぐに理解でき、それ以外のほとんどの学生には理解しにくかった。「ウィールス」が英語母語話者には、発音の関係ですぐに理解できず、英語を学習したことのない学生が先に意味を理解するというようなこともあった。また、生教材に使われている「風潮」を生教材には使われていない類義語の「動向」、「傾向」と比較しようとするようなこともあった。

15）「文章理解を促進する語彙知識の量的側面－既知語率の閾値探索の試み－」には「文章理解課題の約8割以上で正答するには、96%程度の既知語率が必要であることが示唆された」と述べられている。

16）中でタイの学生が17の記事について意見・感想文を書き、自主的にレポートとして提出したが、その中に「大学改革（独立法人化）」に関するものもあった（資料2(5)）。他に、授業中に速読をさせ、口頭で内容を確認した経済に関する記事、他の学生が切り抜いてきた記事、教師がこの学生に渡した母国タイに関する記事などがあった。この学生には読みにくいのではないかと思われるようなトピックも合わせて、１つ１つについての意見・感想文を書いてきた。読みやすさの異なるさまざまな生教材を与えることで、自主学習が進んだ例である。

17）ここでは授業で多用した新聞記事に限る。小説形式の読み物は新聞などの記事と異なり、表面的な情報だけ把握できても、内容の深い理解ができたことにはならない。漢字が少なくて会話が多いなどかなり簡単に見

える読み物でも、文面には説明されていない背景や登場人物の感情などが読み手にも当然わかっているものとして話が進められるので、実際にはかなりの読解力が必要とされる。『速読の日本語』「本書について　－学習者の皆様へ－」p(10) 参照。

18) 注２）参照。

19) 2003年春学期～2004年春学期に受講した学生が使用した生教材について、2004年10月18日、登録前の授業時にニーズ調査を行なった。まとめたものを資料のページに添付した（資料3.)。登録後の学生８人には、ほぼ毎回メモや感想文を提出させている。このクラスも若者語やカタカナ語に関心のある学生が多いが、それ以外に挙げられたもので、授業で取り上げたトピックは、引きこもり、援助交際、ニート、ＤＶ、結婚・離婚、新しいお札、広がるクマの被害、スマトラ島沖地震などである。

20) 2004年秋学期の授業形態については、学期途中であるため章を割いてその全体を述べることができなかった。2003年春学期～2004年春学期の授業形態で『速読の日本語』に沿った練習を含め適応する形態を組み合わせて授業を進めている。内容指向の読解ができる学生のそろったクラスだがレベル差は大きい。それでこの学期は、「こどもページ」と漢字の苦手な学生でも読みやすいと思われる記事の使用量を増やした。共通の生教材を授業中に速読させる場合、授業中に教師側で漢字を含む語彙の板書をすることが多い。特に漢字が苦手な学生には、新聞記事の難易度と学生の理解度を考えて振り仮名つきの語彙リストも配布するなどして予習を促している。

参考文献

岡まゆみ（1998)『中・上級者のための速読の日本語』The Japan Times

小森和子・三國淳子・近藤安月子（2004)「文章理解を促進する語彙知識の量的側面－既知語率の閾値探索の試み－」『日本語教育』120号、日本語教育学会

鈴木睦（1996)「読み手の予測と談話の展開についての覚書　－中・上級の作文教育－」
『言語探求の領域　小泉保博士古稀記念論文集』大学書林

橋本五郎監修（2003)『新日本語の現場』中公新書ラクレ

播磨涼子（2004)「上級日本事情授業報告」
『大阪外国語大学　留学生日本語教育センター　授業研究』第２号

福本亜希（2004)「日本語教育における多読の試み」『日本語・日本文化』第30号
大阪外国語大学留学生日本語教育センター

藤家智子（2004)「上級日本語学習者における口頭発表について　－問題点と指導にむけて－」
『大阪外国語大学　留学生日本語教育センター　授業研究』第２号

宮崎駿（2001)『千と千尋の神隠し』徳間書店、第１巻

米川明彦（1998)「若者語の造語法」『若者語を科学する』明治書院

発行　財団法人入管協会　　編集協力　法務省入国管理局
(2003)『国際人流』March　（第190号）
(2003)『国際人流』July　　（第194号）
(2003)『国際人流』October（第197号）

新聞記事（授業で使用したものを一部記載、＊は学生が持ってきたもの）

朝日新聞

1993年12月24日「大阪弁　好きやねん　留学生スピーチコンテスト」

2004年４月20日「よつ葉びより」＊

2004年６月５日「やまぬ惨事なぜ　佐世保の父の姿『ああ同じ』学校と安全」＊

2004年６月５日「タリバーン時代は体に鎖巻かれたよう
アフガン留学生ディーバさん　女性の苦難聞いて」＊

2004年６月５日「ミョウガの効能」（読者投稿記事）＊

〃　「人と人の間で生きて人間に」（　〃　）＊

〃　「街中に広がれ院内の優しさ」（　〃　）＊

読売新聞

2001年５月27日「相手の立場で悩みに答える／あなたはひとりじゃない　大平光代さん」

2002年３月８日「『岩波イスラーム辞典』刊行　理念と現実複眼で見る」

2002年５月13日「イスラムとの対話　日本外交のひ弱さ痛感」

2002年８月５日「多言語の法令・判例検索　リスク回避へシステム化」

2002年10月16日「『新語・流行語辞典』刊行」

2002年12月４日「『マレー語化』は失敗●マハティール首相　英語力低下〃自己批判〃」

2002年12月10日「外国人労働者受け入れ論議活発化」

2003年１月20日「■映画『戦場にかける橋』の舞台　タイ・カンチャナブリ」

2003年２月17日「■流行歌『木浦の涙』の舞台　韓国・木浦」

2003年４月10日「－本社全国世論調査－『カタカナ語多過ぎ』８割超」

2003年４月22日「ムカツク　ウザイ　キモイ　強い言葉でぶつける傾向」

2003年６月２日「■林芙美子の『浮雲』の舞台　ベトナム・ダラット」

2003年６月９日「■詩『青銅の騎士』の舞台　ロシア・サンクトペテルブルク」

2003年８月４日「人口減少社会　消えてゆく働き手」

2003年８月４日「人口減少社会　外国人就労長期的視点で」

2003年11月23日「馬頭琴の音色聞いて」

2003年11月23日「ポップカルチャーに影響　米の名物個人書店」

2003年12月24日「謙譲語の価値見直そう」

2004年１月12日「米ＩＴ金融産業　雇うなら海外　人件費安いインド・中国へ移転加速」

2004年１月15日「米大統領選　2004　ＹＥＳ？　ＮＯ？　ブッシュ流」

2004年１月23日「ミャウリンガル　我が輩の気持ちわかるニャ～」

2004年２月７日「公教育での“スカーフ禁止法”採択へ　なぜ進まぬイスラム系の仏社会同化」

2004年２月21日「大学改革　自由に特色出せるように」

2004年２月23日「■漫画『ピーナッツ』の舞台　米カリフォルニア州　サンタローザ」

2004年３月13日「タイの子どもたちの中学進学を支援　ダルニー・シーラオさん（24）」

2004年４月９日「ベトナム政府　王宮跡ハノイ残す英断」

2004年５月30日「地球万華鏡　不死身の肉体になりタイ!?」

2004年６月１日「ムエタイの校内大会で優勝したよ。シティデェ・バンティ君14歳」

2004年6月5日「乱れる敬語　誤用は意志疎通阻む恐れ　原則学べる機会必要」
2004年7月1日「看護師・介護士『外国人に開放』申請　改革特区　病院など12施設」
2004年7月3日「対タイ・マレーシア・フィリピン　繊維製品の関税全廃　日本、合意へ」
2004年7月6日「外国人労働者どう受け入れる？」

インターネット資料
「首相官邸　キッズルーム　内閣の役割　行政のしくみ」
http://www.kantei.go.jp/jp/kids/senior/4 4.html

資料1．学習者の作成したレジュメ

（紙面の関係でレジュメは1人分のみ記載した。提出時のままで、文法の間違い、誤字・脱字・変換ミス等には手を加えていない。レジュメ・感想文・メモに関しては以下同様。）

「新日本語の現場」1	「とか弁・よ直し・ヤツ退治」	2002年5月13日読売
2	「傷つくのが怖いとか・・・」	2002年5月14日 〃
3	「"とか弁"は意外に長命」	2002年5月15日 〃
4	「素敵にもなる!?『とか』」	2002年5月16日 〃
5	「あいまいさに違和感」	2002年5月17日 〃

MA　韓国（I）

「とか」の用法

1

「支店**とか**連絡**とか**しておきましょうか」（X）
⇒「とか」は「支店とか支社とか」、「連絡とか報告とか」のように、**同類の事柄を並べて言う場合に使うもの**。一つの場合に「とか」は不要のはず。

「もう少しお手ごろな**ヤツ**も**ございます**が・・・」（X）
⇒「ヤツ」はけんかしたり、ののしったりする時に使う**乱暴な言葉**、「ございます」は**丁寧な言葉**

2

「鈴木さんと話**とか**しました」
全体16.2%、16～19歳の女性54.0%、男性40.8%
⇒　物事を断定せず、**あいまいな雰囲気を醸**（かも）し出す効果

「話をした」：特定の問題
「話とかした」：会話だけが目的ではなく、雑談といった感じ

＊　文化庁の**分析**：傷つくことを怖がり、相手と距離を置いて付き合いたいという最近の若者心理の表れなので、**自己防衛本能**

3

『三省堂国語辞典』、1992年発行の第四版：はっきりしていないことを表す

『岩波国語辞典』、1980年頃：『とか』で言いさして、さらには付けるまでもない文末に加えて、（自分の発言の責任を内容と共に）ぼかす用法が若い世代に広まった

「温泉とかに行こうかな、**とか**・・・」：実際に温泉に行かなかった場合の**責任を回避**

4

伝統的用法：人に聞いたり記憶があいまいだったり、不確かな事柄を指す

例）　平安時代の「源氏物語」

現代的用法：今の若者が好む「とか弁」と共通

例）夏目漱石の小説「吾輩は猫である」

＊歌人の俵万智さん：柔らかい感じを出す**緩衝材**、「言葉の虫眼鏡」

⇒　相手の感情に配慮する、日本人的なものの言い方の伝統を受けついでいる

5

「私、ＯＬ**とか**やってます」

⇒　自分がＯＬであるというのは明確な事実なのに、「とか」を使ってあいまいにしようとするから違和感発生（塩田雄大－ＮＨＫ放送文化研究所の研究員）

「コーヒー**とか**飲もうよ」

⇒　断定を避け、相手に他の選択の機会を残した言い方なので許容できる

場面や聞き手に配慮して、適切な言葉遣いを選ぶ工夫が必要

資料２．学習者の要約・感想文・メモ

(1)「■流行歌『木浦の涙』の舞台　韓国・木浦」(2003年２月17日「遊歩人」) の感想文

「木浦の涙　韓国の木浦（モッポ)」　　Ｍ　韓国（Ｐ）

この記事を読んで驚いた。

日本の植民地時代のモッポについての記事だ。

驚いた理由の一つ目は、植民地時代、モッポの当時の人口の３分の１が日本人だったということで、二つ目は、モッポの旧市街には、日本家屋、町工場、遊郭だった建物などがそのまま残っていたということだ。

今まで、「モッポがそんなに影響を受けたのか。」というぐらい、モッポのことについて良く知らなかった。「モッポの文化院自体も、1900年に日本が領事館として作った洋館をそのまま使っていた。」と述べた金さんの話を読んでまた驚いた。

今まで、韓国は、植民地時代の跡を無くすため非常に多くの努力をしてきたと思っていた。手が回らなかった所もあるはずだが、モッポは大都市だし、そんなに残っているとは思わなかった。

何か、悲しかったのは、「日本家屋がこんなに残っているのは、建て替えるお金がないからです。」といった、

金さんの話だ。この話は逆に考えてみると、お金があれば、早く建て替えたいという話にもなるのではないか、つまり、植民地の跡を無くせ、その時のことを忘れたいという気持ちではないかと思ってみた。
モッポの涙という歌は今までも、歌われている。名曲だというのは確かだ。
そう見れば、韓国の有名な小説とか歌、詩などはその時作られたものが多いような気がする。

資料２．(2) ～ (4)「外国人労働者受け入れ論議活発化」についての要約・感想文・メモ

(2) ＲＡ　マレーシア（G）

・外国人労働者についていろ々な見方がある。日本に対する外国人労働者を受け入れる方法は最近、議論になる。
・外国人に対する社会問題になることと、その現困とは：
　・言語と習慣の違があってお互に理解を取れない所がある。特に日常生活の会話
　・人柄や教育背影に関して情報不促で日本人と交流するのが問題
・マレーシアでも最近トラブルをする外国人が少なくない。

(3) Ｉ　ベトナム（H）

私は外国人ですから、もちろん、外国人労働者の受入れを賛成します。外国人労働の受入れが実施されれば、私たちは外国人として、大得です。しかし、日本人の観点から見ると、心配することはないわけではない。それは以下のことです。

1．日本人の所得　外国人が日本で就職すれば、つまり、日本人の所得に影響に与える。
2．日本の治安　各国の文化が違うから。同じ地域に同居すれば、色々な問題が生じる。
3．日本の人力の財源　この記事によると、ＩＴ関連の専門家など重要な分野を外国人がすれば、色々な問題が出でしょう。

（上記（3）については記事中の「一方、工員などの単純労働者については」以下の文章がきちんと読み取れていないと考えられる。）

(4) ＭＡ　タイ（I）

① ４つの選択肢
　わからないことば
　（地ならし、特定、動向を踏まえ、先行（先に行くこと）あまり自信がない。憶測、外相の諮問機関）
② ２つの試算（試算、敏感、容認、警鐘を鳴らす）
③ 外国人労動者（閣議）
④ 鈍い対応（入管法、地方がしりぬぐい、就学）
＊ 内容はだいたい分かりました。(50%以上）と思います。

資料2 (5)「大学改革　自由に特色出せるように」の感想文／MA　タイ（I）

自由に経営とはいいけれども、学長がアホーの人だったらどうする？
例えば腕力のない学長や能力のない学長などがいればみんなが頼れるかどうか自信ないよね。もしかしたら自分のために利益をもうけるかもしれない。
自分で経営できない大学があれば少し待っていいから　それとも文部科学省がちゃんと支配しないといけないと思う。僕は僕なりにの意見を述べたから間違いかねますから　もうしわけありません。

資料3．生教材の理解度と学生のニーズ

（ここでは理解度についてのみ表にして記載した。）

対象：2004年秋学期登録前の授業見学に来た上級レベルの学生27人（有効回答数23）。
JC·JP·JL（日本語・日本文化研修生）RA（研究生上級）MA（短期留学生上級）

日時：2004年10月18日3限。

目的：登録後の授業形態・教材の調整。

方法：2003年春学期～2004年春学期に使用した新聞記事を4種類配布。関心のある記事を選ばせて、速読させた。理解度（%）と関心のある分野、授業を選択した場合、読みたいものについて自由記述で回答・記入させた用紙を授業時間終了時に回収。
（アンケートの日本語を部分的に抜粋。表記・表現は文意を変えない程度に手を加えたものもある。）

使用した新聞記事の見出しと略称：
読売新聞「外国人労働者どう受け入れる？」→「外国人労働者」
「大学改革　自由に特色出せるように」→「大学改革」
「ムカツク　ウザイ　キモイ　強い言葉でぶつける傾向」→「強い言葉」
「相手の立場で悩みに答える／あなたはひとりじゃない　大平光代さん」
→「相手の立場」

クラス	国籍 氏名(略称)	理解度(%)及び理解度についての記述
MA1	韓　　国(J)	(理解度の記入はなし)
MA2	韓　　国(Y)	(理解度の記入はなし)
MA2	中　　国(Q)	生教材の理解度は80%
MM2	オーストラリア(C)	読解は大丈夫です。(理解度の記入はなし)
RA	ブルガリア(G)	「大学改革」90%
JC	イタリア(B)	「強い言葉」ほとんど理解できた。「外国人労働者」60%
JC	オランダ(C)	「外国人労働者」辞書使用:90%、辞書なし:60%
JC	ニュージーランド(F)	「外国人労働者」辞書使用:80%、辞書なし:50%、「強い言葉」80%
JC	ブルガリア(T)	「相手の立場」85%(難しいと思った記事はなかった)
JC	ブルガリア(N)	「外国人労働者」60～65%、「強い言葉」90%
JC	ベトナム(T)	「相手の立場」55%
JC	ポーランド(C)	生教材の理解度は90%

JC	ポーランド(L)	「大学改革」95%(文法はとても簡単、よくわからなかった5%は語彙)
JP	ウクライナ(I)	「相手の立場」95%、「外国人労働者」85%
JP	ウクライナ(S)	「相手の立場」85%、「外国人労働者」95%
JP	スエーデン(A)	「相手の立場」「強い言葉」両方とも75～80%
JP	ベトナム(L)	「外国人労働者」80%
JL	アメリカ(C)	(理解度の記入はなし)
JL	インドネシア(L)	「大学改革」75%
JL	スイス(J)	「大学改革」70%
JL	ベトナム(N)	「大学改革」70%
JL	ベトナム(H)	(理解度の記入はなし)
JL	ポーランド(G)	生教材の理解度は65%(用語が多いほどわかりにくくなる)

(たかつき　きみ　　本センター非常勤講師)